

国民体育大会 少年女子の部 初代王者！



INTERVIEW

少年女子・梅原聖和監督

「ここから日本の女子サッカーの未来を 背負って行ってほしい」

MATCH REPORT

第77回国民体育大会・関東ブロック大会

第27回東京都サッカートーナメント

JFAバーモントカップ

第32回全日本U-12フットサル選手権大会

TECHNICAL REPORT

2022東京国際ユース(U-14)サッカー大会

TOKYO FA's Pick Up

サッカー巡回指導

TOPICS

日本サッカー協会 SDGsの取り組み

私たちは 東京都サッカー協会を 応援しています。

初声町和田長浜太陽光発電設備



神奈川県初声町和田(和田長浜海岸側)
2021年4月
取得名義:株式会社スカイ・ランド
(日本水資源開発株式会社関連会社)

人を潤し自然を守る
ECO UP PROJECT

 日本水資源開発株式会社

代表取締役 松永 利明

《東京営業所》

〒142-0063 東京都品川区荏原3丁目2番6号
TEL 03-3477-2477 FAX 03-3477-7661

「サッカーに関わる子が増えるきっかけに」 サッカー巡回指導の取り組み

2003年からスタートし、今年で19年目を迎えた「サッカー巡回指導」。
キッズ委員会巡回指導部長を務める佐藤一恵さんに話を伺った。

巡回指導とは

「巡回指導」とは日本サッカー協会(JFA)がキッズ年代(6~10歳)へのアプローチとして2002年に立ち上げた「JFAキッズプロジェクト」の中の一つの取り組みで、幼稚園や保育園、小学校等の場に巡回して、サッカーを楽しむ時間を提供するものだ。東京都では幼稚園、保育園を対象とし、平日の午前中で1回90分間の開催。FC東京、東京ヴェルディ、三菱養和とサッカーズ、FC町田ゼルビア、横浜武蔵野FCの東京を代表する5クラブと、東京都サッカー協会キッズ委員会が協力する形で活動している。指導に必要なボール、ゴール、マーカーコーン、ピブス等はスタッフが持ち込むので園側の準備品は不要。園庭がない場合は、近隣の公園や小学校を借りる形でも開催可能だ。コロナ前の2019年は年間延べ150回(複数回開催する園も含む)の巡回指導を行っていた。

指導はまず走ったり、スキップしたり、ジャンプしたり、徐々に身体を動かしていくところから始まる。そこからボールに慣れるため、ボールを使っているトレーニング。最初は手から、徐々に足に移していき、最後はドリブルに。ドリブルまでできるようになったら、ミニゴールでシュート練習を行う。最後はそれまでやってきたことを生かしてゲームを行うという流れだ。

また、実施にあたっては事前に園での遊びの様子やクラスの特徴について聞き取りを行い、メインコーチとメニューの打ち合わせをしています。実際に指導中にボールを扱うことに慣れていないと感じたときには、予定していたメニューよりも簡単なものに切り替えて指導を進めていくので、終わってみると初めての子も経験のある子もみんな、楽しかった!もっとやりたい!と言ってくれます。

園児にとって90分間は長いと思われる事もありますが、あつという間だったね、もっとやりたいね、と言う声がほとんどです。最初は「ええ、わかんないし怖い」なんて言っていた女の子の方が意外に変貌を遂げています(笑)」



PROFILE



キッズ委員会巡回指導部長
佐藤 一恵



「1人でもサッカーに関わる子が増えてくれたら」

現在、巡回指導部長を務める佐藤さんは、もともと保育歴29年のベテラン保育士で、“受ける側”としても巡回指導を経験している。

「やっぱり私たちが毎日保育している時の子供の表情とか、いつもやんちゃで私たちの言うことを聞かないような子たちが、コーチが来ると目をキラキラさせているんですね。もうまったく別人のように、コーチのお話をしっかり聞いて、楽しそうにサッカーをやっている姿をずっと見てきました。専門のスタッフが行って指導するということで、子供たちのテンションが上がって、すごく楽しく、初めてボールを触るような子も、保育園では見せないような姿を見せたりする。この子、こんな一面があったの?というような発見ができることがすごく楽しい。そんな巡回指導を今後も継続させていければと思っています」。



「サッカーというと先生たちにも固定観念があって、テレビで見る試合や細かいルールなどがイメージされて、難しいと思っていることが多いです。だけど、まずはボールに慣れる。ボールに触れて遊ぶところから入って、女の子でも初めての子でも、誰でも楽しめるメニューで進んでいき、最後にサッカーのゲームという形で終わるのですが、そこに自然と流れていくというか、途中で嫌になっちゃう子もいなく、最後のゲームがすごく盛り上がり終わるんですね。なので、これくらいなら日頃から保育園でも出来るよね、と先生方にサッカーをより身近に感じてもらえる事が大きな目的だと感じています」。

「巡回指導に行って、私たちがサッカーの指導をして終わりではなくて、そこがきっかけになって、先生にそのままボール遊びとして繋げていただいて、その中から1人でも2人でもサッカーが楽しい、小学校に行ったらサッカークラブに入りたいとか、そのようにサッカーに関わる子が1人でも増えていくと良いなと思っています」。

巡回指導の申し込み及び詳細は、
東京都サッカー協会ホームページをご確認ください。





少年男子、少年女子が本大会出場決定

第77回国民体育大会

関東ブロック大会 サッカー競技



得点を決めた庄司啓太郎選手

主催：(公財)日本スポーツ協会、東京都、関東ブロック各県教育委員会、群馬県、埼玉県、神奈川県、山梨県、関東ブロック各都県体育・スポーツ協会、(一社)関東サッカー協会、世田谷区、北区、調布市

大会期間：2022年8月13日(土)～2022年8月14日(日)
2022年8月20日(土)～2022年8月21日(日)

会場：駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場・第二球技場
味の素フィールド西が丘
AGF フィールド

本大会が開催される栃木県を除く関東1都6県の7チームが成年男子は2チーム、少年男子・少年女子は各3チームの代表枠を争った。

少年男子

本大会出場決定



代表決定戦

東京都 2-0 山梨県
0 (前半) 0
2 (後半) 0

得点：43分 庄司 啓太郎(東京都)
58分 佐藤 龍之介(東京都)

少年男子は『繋がり』を大切にして本大会出場決定

小野寺章監督(瑞江第三中学校)は「一発勝負というところでこのミニ国体(通称)が一番厳しい戦いになるだろうなというのはスタッフ、選手も感じていた。このチームのキーワードが『全員でやろう』であり、今日も全員でしっかり勝ちを取るぞでゲームに入って、その通り全員がそれぞれの役割プラスαで頑張ってくれたのでこういう結果で終わって良かった」と振り返った。

代表決定戦当日は台風が関東に接近。強い雨風が吹き荒れるなど難しいコンディションの中での一戦となった。「最初はきちんと守備から入り、攻撃はうちの崩しのパターンがいろいろあるので、そこを共通理解して普段通りやろうと。ただ守備の強度だけは絶対に落とすなと言って送り出した」(監督)。しっかりとした守備からリズムを掴むと、「素晴らしいグラウンドだったのでそんなに影響はなかったんですけど、ちょっと雨が強かったのでもいつも以上に丁寧にパスコースを作ってというのを意識していた」とMF佐藤龍之介(FC東京U-18)がいうように悪条件の中でも連続してパスを繋いで相手ゴールへ迫っていった。

前半はゴールこそ生まれなかったものの、良い流れの中で後半に入ると8分に試合が動く。FW大久保祐希(東京ヴェルディユース)のクロスにニアに飛び込んだのはFW庄司啓太郎(横浜FCユース)。「ヘディングは自分の武器。自チームであり出られていない分、国体チームで結果を出して代表だったりステップアップすることが目標」と話す10番のゴールで先制する。さらに23分には連動した動きから「自分のゴールで東京を全国に連れて行きたいと思っていた」という佐藤が決めて一気に勝ちを手繰り寄せた。終盤には風雨が強まり、約1時間の中断も挟んだが、最後まで集中力

を切らすことなく戦い抜き、勝利を掴んだ。

今年の東京は小野寺監督も「本当に個の力がすごく高い」というタレント集団。そういった中で『繋がり』という部分を大切にしてきた。佐藤は「みんなそれぞれのプレーがあるので、そういうのをいっぱい話し合って、伝え合ってというのを半年間積み上げてきました」と話す。それにより時には意見の相違などもあったというが、その中でしっかりとベクトルを合わせながらチーム力をつけてきた。そして登録された16名それぞれが、この場に來られなかったトレセンメンバーたちの想いも背負い、今大会に臨んでいた。

大会直前に行われた小平グラウンドでの練習では2013年に東京の主力選手として2013年の東京国体優勝したFC東京のMF安部柊斗選手から激励も、また試合前日のミーティングでは田中大蔵コーチ(三菱養和SC)の繋がりから同国体メンバーのMF相馬勇紀選手(名古屋グランパス)からメッセージをもらい刺激を受けた。キャプテンマークを巻いたDF柴田翔太郎(川崎フロンターレU-18)は「そういう歴代の先輩方がこの東京のエンブレムを背負って戦ってきたと思うので繋いでいけるように。それこそ監督もおっしゃっていた『繋ぐ』というところも、そういうところにも意味があると思うので、キャプテンとして繋いでいけたら」と話した。そういった『繋がる』意識や想いのひとつひとつが東京チームの原動力となり、本大会出場に繋がった。

大会結果 第77回国民体育大会

1回戦	10月2日	兵庫県	1-2	東京都
2回戦	10月3日	愛知県	0-2	東京都
準々決勝	10月4日	東京都	1-2	神奈川県

成年男子

志半ばでの敗退も 次世代に繋がる試合に

準優勝した2018年以来となる本大会出場を目指した成年男子だが、トーナメント1回戦で山梨に0-1で敗退。李成俊監督(明治学院大学)は「自分たちのやらなければいけないこと、そこをもうちょっと増やせし、チャレンジしても良かったなというところはあるんですけど、それが現実ですし、実力だったなと思います」と唇を噛んだ。

前から積極的に仕掛け、ハードワークして追い越すようなランニングを増やして相手を押し込むことを狙いとしていたが、「思ったよりもやっぱりみんな足が動いていなかったのか、何故かはわからないですけど、運動量という面では全然不十分だったなと思います」とMF廣澤勇太キャプテン(東京蹴球団)。前半は独特の雰囲気に飲まれた部分もあってか固く、なかなか運動量が上がらず。すると前半終了間際、敵陣でのボールロストから一気に背後を突かれ、失点した。

「時間が短いレギュレーションなので、1点ビハインドになってからは次の1点をいつどこで取るかというところにフォーカスして、2点目を取られるリスクもあるんですけど、そこは彼らと話してゴールを奪いに行くことを確認した」(監督)という後半は相手を押し込む。「相手のサイドはあまり守備がなかったんで、そこでしっかりクロスを上げたり、深い位置まで行こうと話はしていて、実際そういう攻撃ができていた部分もあった」と10番のMF涌井蓮(明治学院スカーレット)がチャンスメイクするなど連続して前へ。最大のチャンスだったのが33分。右クロスにMF窪谷亮佑(専修大学体育会サッカー部)がすらしたヘディングは惜しくもポストに。後半は自分たちのスタイルを取り戻し、ゴールまであと一歩まで迫っていただけに「これが70分間出せていたら……」とそれぞれが前半の戦いを悔いた。



1回戦

山梨県	1-0	東京都
1	(前半)	0
0	(後半)	0

これで本大会を目指した活動は終了。廣澤は「本当にスタッフの方々だったり、裏方の方々が良い環境を用意してくださったので、自分たちはプレーに専念出来ましたし感謝しています」と話す。そしてもうひとり感謝の言葉を贈ったのが最年長のGK徳吉裕介(Intel Biloba Tokyo)。「トクさんには本当に感謝をされていて。なんとか勝ちたかった」。その徳吉は「一致団結するという部分ではすごく大変でした」と明かす。成年男子は各県、ひとつのチームがメインとなって参戦すること多いが、東京は社会人、大学生も含め、複数のチームから選ばれた選手で構成。そのため最初のうちはなかなかうまくいかない時期もあったというが、徳吉らが若い選手が発言しやすい環境を作り、その中で個々だった選手が同じベクトルを向いたチームに。「そういう部分ではものすごく良いチームになりつつあった。もっともっと良いチームになるような素質があっただけに本当に悔しいです」と志半ばでの敗退を悔やむ。

そういった先輩たちの姿に刺激を受けた選手もいる。涌井は所属する明治学院でトップチームから落ち、サッカーに対する熱が冷めかけていたという中で李監督から声をかけてもらったことで目線が変わったという。「目指すものがなく毎日を過ごしている中でこういう活動に関わられて、社会人でもサッカーやっている人を目の前で見て、ガラガラしているものを感じた。やっぱりサッカーは楽しいというものを感じられたし、社会人になってもサッカーをやるという選択肢が、自分の中で本当に0だったものが10にも100にもなっていた」と再びサッカーへの熱を取り戻した。「またりベンジしたいという気持ちもあります」。敗れはしたが、そういった先輩たちの残したエネルギーは次世代に繋がっていく。

少年女子

本大会出場決定



代表決定戦

東京都	5-0	千葉県
1	(前半)	0
4	(後半)	0

得点: 25分 夏目 真凛(東京都)
42分・47分・57分 梅本 恵(東京都)
66分 新井 萌禾(東京都)

少年女子は初開催の大会で本大会出場決定

初開催となった少年女子カテゴリーでしっかりと本大会出場決定。梅原聖和監督(杉並総合高等学校)は「プレッシャーは大きかったです」とまずはホッとした表情を見せつつ、「彼女たちの力はもともと優れたものがあるので、その力を最大限、ベストを尽くせば勝ち切れると信じていました」と選手たちに対する信頼を見せた。

立ち上がりは固く入ってしまったこともあり、千葉に何度か危ない場面を作られたが、「なんとかその苦しい時間帯を凌いだことがまずは試合のひとつの大きなポイントになったかなと思います」と指揮官が振り返ったようにここを無失点で耐えると25分、スローインからの展開で最後はMF夏目真凛(浦和レッドダイヤモンズレディースユース)が右足を強振しロングシュートを決めて先制した。「キャプテンという立場で、やっぱり自分がやらないとみんなもついてこないと思うので、まずは自分が率先してやって、チームの士気を上げられるように意識している」というキャプテンの1点で試合を動かした。

「前半はみんな流れがつかめずにいた。でもハーフタイムでしっかり話し合って、後半は東京が主導権を握った良いゲームにできたと思います」(夏目)

42分、FW梅本恵(十文字高等学校)のゴールで追加点を奪うと、その梅本は47分、さらに57分にも決めてハットトリックを達成。特に3点目は自分でサイドを切り込み、切り返しから右足でコースを突いたゴラッソ。「左

から巻いて入れるのは練習していた形だったので嬉しかったです」と梅本。ここまでの選抜のゲームはなかなかゴールを奪えていなかっただけに「ここで頑張ろうと思っていた」。そんな苦しんだFWのゴールに梅原監督も「彼女の努力が今日ひとつ結ばれたのかなと思う」とした。66分には左CKからMF新井萌禾(十文字高等学校)がヘディングを沈め、5-0で勝利した。また、指揮官が「スペシャル」と話すFW藤崎智子(浦和レッドダイヤモンズレディースユース)はゴールという結果は残せなかったものの、縦への推進力やゴールへ迫るプレーで存在感。「今回は結果こそ出せなかったんですけど、トレセンリーグ1位通過で、今日この日を迎えられたのは藤崎智子の得点力というところが非常に大きかったと思います」とチームを牽引し続けたエースの功績も讃えた。

U-16を対象とした少年女子の部は今年度からスタート。梅原監督も「自チームではまだスタートしたばかりで出られない選手が大きな舞台を経験するということは選手の成長にとっても非常に重要なことだと思う」と話す。昨年は日テレ・東京ヴェルディメニーナの主力として全日本U-15女子サッカー選手権大会で日本一を経験している梅本は「自分がどういうふうチームに良い影響をもたらせるかというのをここは学べる場だし、何をやりたいか、どういうプレーをしたいか、どういうアイデアを出してこういうことをほかの選手に求めたり。そういうことを自分ができるようになって、チームに戻って、チームでもそれができるように頑張りたい」と語った。(本大会の結果は、次ページをご覧ください。)



国民体育大会 少年女子の部、初代王者！ 東京都少年女子・梅原聖和監督インタビュー



まずは優勝おめでとうございます。以前国体関東ブロック大会（ミニ国体）でお話を聞いた際に発足から本大会（国体）で優勝することを目指したと話されていた中で見事実現しました

梅原聖和監督：ありがとうございます。（少年女子の部は）初年度で、手探りの中やってきました。まずは、協会の方々のバックアップに感謝しています。最初のスタッフミーティングでは、中田康人技術委員長にサポートしていただいて、様々なノウハウを教えてくださいました。立ち上げから、本当に手厚いサポートをしていただきました。他県はわからないですけど、東京は「絶対に日本一を取りに行くんだ」という、その熱量が確実にありました。

一戦いを振り返って

香川戦は初戦の緊張もあり、開始早々に失点をしてしまいましたが、京都戦は立ち上がり本当に良く、どんどん相手を押し込むような形でした。特にMF新井萌禾（十文字高等学校）が攻守にわたってアグレッシブで、そこでチームもグッと流れに乗れました。藤崎智子（浦和レッドダイヤモンズレディースユース）も非常にパフォーマンスが良かったです。彼女が前を向いて仕掛けると、京都のDFは簡単に止められない。選手たちが躍動したゲームで、落ち着いて見てられましたね。

一鹿児島戦は1点を争う戦いになりました

厳しかったですね。事前に鹿児島の映像の分析もしていたんですけど、個の能力が高く、神村学園のいわゆる単独チームですが、神村特有の球際へのプレス、ボールを持ったら2人3人で囲んで奪いにくる。非常にコンパクトな守備からのカウンター、速攻というのは、映像で選手には伝えていたのですが、実際にそのプレッシャーの中で前半はなかなかボールを繋げなかったですね。丁寧にビルドアップを試みるも、縦パスを入れたらグッとくるので、そこで何回も失いました。でも、勇気をもってやり続けるぞと。しっかり動かすぞと言いつつ続けました。選手たちもそれに伝えてくれて、何とか前半終了間際に藤崎がゴールを決めてくれたのですが、本当に苦しい試合でした。

一やはり藤崎選手はエースで、今大会は準決勝まで毎試合ゴールを決めました

やっぱり苦しい時間帯とか、決めるべきところでしっかり決めてくれます。彼女はこの年代ではスペシャルな選手ですね。準決勝で負傷して途中交代しましたが、ラスト5分ぐらいでもう1度藤崎を出しています。最後かなり鹿児島の猛攻を受けてバタバタして、選手の表情を見ていてもこれはまずいと。高田トレーナーに藤崎の怪我の状態を確認して、5分なら、ということで。藤崎がピッチに入ったら、当然相手もそれだけで脅威です。リスクを負って攻撃はするけど、守備のことも考えないといけないというのが相手の心理。チームにとってもエースが戻ってきたとなると、最後までやるぞという士気に繋がる。極端な話、センターサークルから動かなくていいからなと、そんな風に言っていたんですけど、ラスト5分、ゲームを締めるためにもクロウザーみたいな形で出しました。

一それくらい存在の大きな選手だったと。決勝はエース不在で難しいところもあったと思います

東京の強みは、藤崎と梅本恵（十文字高等学校）の4-4-2の2トップ。あの2トップをどうやって生かそうかというようなチーム作りから始まっている部分もあります。決勝に向けて、そうすればあと一つ勝てるかと、スタッフともしっかり話し合って、最後は一人で部屋にこもって考え込みました。

（その中で）でも、他の選手たちはミニ国体からこの大会を通してかなり成長してきました。自信をもって、プレずにいこうと。藤崎がいなくても、フォーメーションはいままでの戦い方でやりました。丁寧に繋ぎながら、相手を見てボールを動かして、東京のサッカーを貫こうと言って、決勝に臨みました。

1点目は自分たちがボールをしっかり保持して、ボールも相手も動かして、仕掛けるところは仕掛けて、最後ワンタッチ、ツータッチのテンポの良いサッカーができました。ダイレクトプレーもあり、右サイドバックの選手がゴール前まで上がって、そこか

大会結果 第77回国民体育大会（サッカー競技）少年女子

1回戦	vs 香川県	○ 5-1	得点：11分 梅本 恵、25分 山崎 亜沙、26分 藤崎 智子、65分 藤崎 智子、69分 福島 茉莉花
準々決勝	vs 京都府	○ 6-0	得点：6分 藤崎 智子、29分 新井 萌禾、32分 藤崎 智子、34分 小島 世里、36分 大山 真由奈、44分 山崎 亜沙
準決勝	vs 鹿児島県	○ 1-0	得点：35+1分 藤崎 智子
決勝	vs 静岡県	○ 2-1	得点：25分 佐藤 美晴、42分 新井 萌禾

らフィニッシュを決めました。全員が流動的に動きながら、相手の嫌なところに入って、テンポ良くボールを動かして決めたシーンでした。本当に彼女たちの成長を感じました。偶然ではなく、自分たちのやるサッカーというものを自信を持ってできた証拠、結果だったのかなと思います。

一優勝を決めた瞬間というのは最高だったと思います

本当にプレッシャー、重圧がありましたね。国体少年女子は初めての開催で、私自身、国体には関わったことはないですし、トレセンはU-15の年代、U-17は経験がありましたけど、初めてだったので。周りからも「東京は優勝しかないでしょ」とか、「勝って当たり前でしょ」みたいな声も聞こえる中で、もう本当プレッシャーで、プレッシャーで。苦しい日々が続いたことは事実ですし、やっと解放されたというのもひとつ本音ではあります。ですが、それと同時に、これで終わってしまう寂しさもありました。もちろん優勝が嬉しいのは当たり前ですけど、選手たちをずっと1年間見続けてきて、こんなに成長するんだというのは、指導者としての喜びや学びとなりました。

一どの辺りに1番成長を感じられましたか

最初は全然チームになっていなかったですし、先日、祝勝会時にキャプテンのMF夏目真凛（浦和レッドダイヤモンズレディースユース）もスピーチで、「最初は全然もうチームがバラバラで」と言っていたんですけど、まさにその通りで（笑）。最初のチーム作りは苦しかったですけど、トレーニングでもオフでも、選手と密にコミュニケーションを図りました。私だけでなく、野田コーチもそうだし、有田GKコーチも原山主務、高田トレーナーも、それぞれの役割を持ち選手と関わり、ひとつのチームに作り上げたのは、大きいかと。しっかりコミュニケーションを取りながら、選手が自分の特徴を出せるようにもっていったのかなと思いますね。振り返って考えると、ミニ国の直前の合宿からミニ国の試合を経験して、チームとしてもぐっと固まっていたと思います。

一先ほどもおっしゃっていたように、いろんな方の支えもあった大会だったと

林義規会長には本当に感謝していて、2月の選考会の時から来てもらいました。国体の意義、これまでの歴史、国体を経て代表に行っている選手もいる、といういろんな話をさせていただきました。選手たちもそれで背筋がピンと伸びて、キリッとなる。林会長の登場にはスタッフも選手も緊張しますが、非常にありがたかったですね。決勝の試合直後、喜びの余り抱きついてしまいました（笑）。あとは中田技術委員長は先ほど申し上げた通りですし、齋藤登ユースダイレクターには、練習会には必ず来てもらいました。その都度、トレーニングの成果や課題についてフィードバックをして下さいました。中田技術委員長と、齋藤ユースダイレクターは、少年男子もある中で女子にも相当気にかけていただきました。ベテランの指導者の方からのフィードバックは、我々若手の指導者にとっても非常にありがたいことで、助けてもらいましたね。

一最後に一緒に戦ったスタッフや選手へ

スタッフには心から感謝しています。このプレッシャーは苦しいですけど（笑）、またこのスタッフがみんな集まってチームを持ちたいと、そんな気持ちにさせてくれる、最高のチームですね。選手たちにはこれから自チームでの活躍も願っていますし、もっともっと先、いま16歳、17歳ですけど、高校を卒業したその先、WEリーグや、その先のなでしこジャパンで、日本の女子サッカーの未来を背負ってほしいなと思っています。

PROFILE



監督
梅原 聖和
（都立杉並総合高校）

2022 東京国際ユース(U-14)サッカー大会



優勝した東京都トレセン選抜

2022年5月2日に開会式、3日から5日までの3日間、開催地を東京から福島県のJヴィレッジに移しての大会が3年ぶりに開催されました。コロナ禍の影響もあり、海外チームの参加はありませんでしたが国内12チームが参加。好天にも恵まれ、若きフットボーラー達が熱戦を繰り広げました。

【大会形式】

1次ラウンドはグループリーグ、2次ラウンドはグループ順位によるトーナメント戦で実施。

決勝戦は東京都トレセン選抜とFC東京との東京勢同士の戦いとなり、両者譲らず2-2の同点で終え、PK戦の結果、東京都トレセン選抜が初優勝を遂げました。

【テクニカルスタディグループ】

本大会では東京トレセンの選手の現在地をゲームから分析し、選手育成・トレセン活動に生かすことを目的とし、東京トレセンを中心にテクニカルスタディグループによる分析を行いました。

分析内容はチーム評価ではなく、選手個人がU-14年代に獲得すべき項目をどの程度達成出来ているかを6項目に分け、それぞれ分析しました。

大会参加選手はU-14年代ですが、中学2年生に進級したばかりの実質U-13年代であることやコロナ禍でサッカー活動が制限された2年間を考慮し、スタディグループで確認作業を続けました。

東京都トレセンに関しては、一戦ごとにプレーのクオリティが高くなり、意図的プレー（攻守）が多くなってきました。フットボーラーとしての基礎ができる年代であり、選手には日常のトレーニングと試合による経験を積み上げる事が大切と感じました。短い大会期間でも見違えるような成長を発揮する選手が多くいた事は素晴らしい発見でした。



Jヴィレッジスタジアムで行われた決勝戦

【大会全般】

チームではなく個人や少人数で局面を開閉するプレーが多く見られました。一次ラウンドは20分ハーフと短いこともあり拮抗した試合が多く、また久しぶりの大会で選手のモチベーションが高い印象でした。

攻撃面では個人のテクニックが向上している印象を受けました。常にゴールを意識したダイレクトプレーも随所に見られました。課題としてはフィニッシュの精度とサポートの質（特に関わる人数）があげられました。

守備面ではゴール前で粘り強い対応するチームが多く、拮抗した試合が多い要因となっていました。

意図的にボールを奪う中盤での守備はクラブチームとトレセンチームとでは違いがあり、前者は意図的にボールを奪うチーム戦術が浸透し始めている印象でした。後者は、個の力を生かす戦術が多く見られました。

攻守の切り替えでは守備から攻撃への切り替え意識が高く、素早くゴールへ向かうプレーが見られた反面、攻撃から守備への切り替えが遅いチームは上位進出しにくい傾向がありました。

【最後に】

今大会を通じて、『日々の生活』、『サッカーができる環境』、そして『勝負こだわる拮抗した試合経験』が大切であると改めて実感しました。

天然芝での素晴らしいピッチで熱戦が繰り広げられ、大変有意義な大会となりました。大会運営にご尽力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

(公財)東京都サッカー協会 技術委員長 中田 康人

■順位表

優勝	東京都トレセン選抜	7位	ベガルタ仙台
準優勝	FC東京	8位	東京ヴェルディ
3位	FC町田ゼルビア	9位	茨城県トレセン選抜
4位	宮城県トレセン選抜	10位	福島県トレセン選抜
5位	鹿島アントラーズ	11位	東京都中体連選抜
6位	岩手県トレセン選抜	12位	いわてグルージャ盛岡

フェアプレー賞	FC東京
---------	------



第27回東京都サッカートーナメント



第27回東京都サッカートーナメント決勝

立正大学 1 - 0 国士舘大学

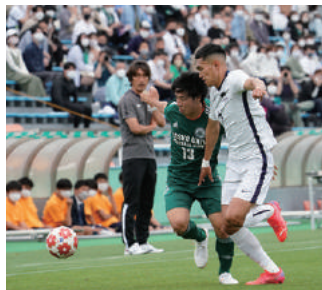
0 (前半) 0
1 (後半) 0

得点：61分 多田 圭佑(立正大)

主催：(公財) 東京都サッカー協会 共催：東京新聞・東京中日スポーツ、共同通信社 日程：2022年5月8日(日) 会場：味の素フィールド西が丘

立正大学が国士舘大学に完封勝利で初優勝!初の天皇杯出場へ

**立正大学が創部初の実皇杯出場決める！
4年生を中心にまとまり粘り強いチームになる**



1975年の本格強化から47年目の快挙達成。最後は10人になりながらも接戦を制し、立正大・杉田守監督は「選手たちが満身創痍の中、最後まで頑張ってくれて、創部初の実皇杯本大会出場ということで大変嬉しく思っています」と歴史を塗り替えた選手たちを称えた。

決勝はカテゴリーがひとつ上の関東1部・国士舘大が相手だったが、相手について綿密に分析。GKやCBから対角のボールを入れサイドから仕掛けてくる相手に対し、ピンチになる場面もあったものの、狙いを持った守備でしっかりと対応しゴールは許さない。

そのままスコアレスで前半を終えると、58分に準決勝の東京ユナイテッドFC戦でも決勝ゴールを奪っているスーパーサブのFW多田圭佑がピッチへ。するとこの交代が実る。61分、左CKをファーサイドでDF安食龍成が折り返し、多田がヘディングでネットに流し込んだ。

終盤にかけては同点弾を狙う国士舘大の猛攻にあったが、キャプテンのDF平松航が声でチームを鼓舞しながら全員で粘り強く守備。交代枠を使い切った終盤に負傷者が出たことで、10人でのプレーを余儀なくされたが、最後まで集中を切らさずに相手の攻撃をシャットアウトし歓喜のホイッスルの瞬間を迎えた。指揮官が「最後は多分攀る寸前の選手もいたと思うんですけど、『勝ちたい』『優勝したい』という気持ちが強かったからこそ最後まで乗り切れたのかなと、選手に感謝したい」と話したように、初のタイトルにかけける想いが最後の粘りに繋がった。

昨シーズンはMF田中宏武(札幌)、DF孫大河(金沢)ら4人のプロサッカー選手を輩出したが、リーグ戦では振るわず2部に降格。新チームは昨年12月にスタートを切った。

そういった中で「自分たちは学生系予選のところから本当にまとまろうと、チーム内で話し合いも重ねてきた」(平松)。杉田監督も「今回4年生が多く出場していたが、平松を中心にまとまりがある。全体数が少ない学年ですが、その分まとまりが4年生になってすごく出てきて、今回練習試合で深港壮一郎選手が怪我をしてしまったんですけど、それまでは後ろ4枚が全員4年生で、そういう意味でも1-0で勝ちきれぬ粘り強いチームになってきたかなと、そのまとまりがうまく良い方向に進んでいるのかなと思っています」と4年生を中心としたまとまりがチームに好影響を与えていると話した。

その言葉を表すように今大会は、12月の予備予選からPK勝ち1試合を挟み、すべて1点差ゲームを制するなど粘り強さが光った。大学代表決定戦では明治大、拓殖大と関東1部リーグ勢を次々と連破して東京都サッカートーナメントへ。準決勝では延長後半アディショナルタイムの劇的弾で東京ユナイテッドFCに勝利、決勝で国士舘大を下し、初のタイトルに輝いた。

FW多田圭佑が準決勝に続き、途中出場から決勝弾！

指揮官がいずれは「得点王に」と推す期待の2年生FWが勝負を決めた。立正大FW多田圭佑は58分から途中出場。その際には「荒田智之のコーチにはいつも通りプレーしろということと、また点を取ってこいと言われていた」という。するとその3分後、コーナーキックが頭上を越えると、セカンドボールを狙ってゴール前に構えていた多田に絶好の折り返し。「夢中で頭を出した」というヘディングは、ふんわりとした軌道を描きながら、ネットに収まり、これが決勝点となった。



多田は準決勝の東京ユナイテッドFC戦でも後半途中から出場し、延長後半終了間際に劇的な決勝ゴールをマーク。2戦連続で結果を出したことに「FWで同点の場面で途中から入るなら、やっぱり結果を求められていると自分は思っている。勝負強さを見せられたのは嬉しいこと」と満足感も見せた。多田は栃木県の名門・矢板中央高の出身。高校2、3年時にはエースFWとして活躍し、選手権でチームの2年連続ベスト4入りに大きく貢献した。大学1年目の昨年は怪我に泣かされたが、「いずれは得点王とかそういう存在になってほしい」と指揮官も期待を寄せるストライカーはこの経験を自信に、まずはスタメン奪取を狙う。

**国士舘大学は悔しい敗戦
飯田雅浩主将「勝ちきらなければいけない試合だった」**

多くの時間を相手陣内で進めたが、国士舘大は勝負を決める1点を奪うことが出来ず敗戦。GK飯田雅浩キャプテンは「リーグ戦からの課題なんですけど、やっぱり得点力の部分に課題があるかなと。それがすべて前線のせいとも言われたらそうではないし、ディフェンスラインからのしっかりとしたビルドアップというのが今日は出来なかった」と反省を口にした。



前半から「ダイナミックなサッカー」を狙いとし、ディフェンスラインからのロングフィードからDF望月海輝やMF高橋尚紀といったサイドの攻撃力を生かしたアタックを狙ったが、相手の対策に遭い、攻め手を失った。22分、FW棚橋亮士を起点にFW古川真人が抜け出しネットを揺らしたが、直前のプレーがハンドの判定になりノーゴールに。失点後の後半終盤にかけても相手を押込んだが、12本のシュートがネットを揺らすことはなかった。

細田三二監督は「やっぱりひとつひとつが甘かった」とした中で「向こうは1部と戦うというので、かなりモチベーションが高いでしょうし、そういった意味では少し戦いづらかった」と吐露。飯田キャプテンもそれは感じていたというが、「その中でもやっぱり勝たなければいけないというのが自分たち1部を戦っているチームでもありますし、そういうプレッシャーがありながらも勝つというのが宿命だと思う。勝ちきらなければいけない試合だった」と悔やんだ。

JFA バーモントカップ 第32回全日本U-12フットサル選手権大会



主催：(公財) 日本サッカー協会
開催日：2022年8月5～7日
会場：駒沢オリンピック公園総合運動場
体育館・屋内球技場

試合結果

グループステージ

vs ヱィクサーレ沖縄FCジュニア(沖縄県)
● 2-5

vs ドリームFC(大阪府)
○ 7-2

vs 八橋FCスポーツ少年団(秋田県)
○ 10-1

ノックアウトステージ

vs ヱィッセル神戸U-12(兵庫県)
● 3-4

「JFA バーモントカップ 第32回全日本U-12フットサル選手権大会」が8月5日から7日にかけて駒沢オリンピック公園総合運動場 屋内球技場・体育館で行われ、東京都代表のFCトッカーノはグループステージを突破し16強で大会を終えた。

7年ぶりの全国。東京のライバルの想いも背負って

第21回大会(2012年)では初出場で初優勝したFCトッカーノ。東京都選・決勝のパディSC世田谷戦では0-2のビハインドから同点に追いつき、延長戦の末に逆転で2015年の第25年大会以来となる7年ぶり3度目の全国切符を掴んだ。

「前回(2015年)はグループステージ敗退だったんですけど、初優勝した時の先輩たちの記録を僕たちも狙うぞという気持ちで大会に来ている」(内野雄介監督)。

また、全国を向かえるにあたっては、東京のライバルチームからのエールや協力もあったという。「フウガさんだったり、リガーレさんだったり、ウナ・プリマヴェーラさんといったチームが試合をやってくれて「東京を応援していますよ」と。そういう想いを背負ってやっていたので、恥ずかしい戦いは出来ないなと。うまい、下手じゃなく、やっぱり全力でプレーする姿を見せなきゃいけないね」と。渡邊拓真キャプテンも「負けてきたチームの想いも背負って全国優勝を狙う」と『チーム東京』の想いも背負って7年ぶりの大舞台に臨んだ。

初戦は固さも、 2戦目は「自分たちのフットサル」で快勝

グループステージ初戦のヱィクサーレ沖縄FCジュニア(沖縄)戦は相手のフィジカルを生かしたプレーや初の全国の緊張感もあり、黒星発進となったが、後ろからしっかりと繋ぎ、ボールを動かしながら前進していく「自分たちがやってきたフットサル」を展開した2戦目のドリームFC(大阪)戦は浪江祥太のハットトリックなどで7-2と快勝。渡邊も「ひとりひとりの個人技が出せてゴールまでちゃんと行けたのが良かった」と振り返る。

結果はもちろん、上に繋げるためにも内容にもこだわる。内野監督は「やっぱり自分たちが練習してきたものを全国大会の場でも出すということが

すごく大事。それをやってみて、通用するのかもしれない。怖がってボールを離してしまったり、ここまでやってきたところで勝負して勝ったとしても次には繋がりがづらいと思う。そこを繋げるためにも自分たちがやってきたことをちゃんと出していくこと」「ただ勝利だけというよりもちゃんと良いサッカーをすれば勝利が近づくと思っている。自分たちが一番意識しているのはそういうところ」と話す。



逆転でのGL突破も16強で敗退 この経験を次へ

逆転でのグループリーグ突破へ。大量点が必要だった3戦目の八橋FCスポーツ少年団(秋田)戦は前日の言葉を体現するように立ち上がりから攻め込み、10-1と大勝。3チームが勝ち点6で並んだ中で得失点差で見事グループリーグ突破を決めた。

この試合で4ゴールを決めた澤邊奏平は「グループステージの1、2戦目はなかなか活躍できなかった。小野大輔コーチから自分がゴールを決めるといよりは人のために何かをする、人を生かしたら自分を生かしてくれるよと言ってくれて本当にその通りだなと思いました」と明かす。味方も生かし、自分も生かされたことが大量点での逆転突破に繋がった。

決勝トーナメント1回戦はヱィッセル神戸U-12(兵庫)と対戦。先に得点を許したが、「メンタル」というコーチの言葉を大切に、負けていても諦めずに、みんな得点をどんどん狙っていった」(出川瑛太)。ビハインドで苦しい時も楽しみながら、落ち着いて自分たちたちのやるべきことをやる。この「メンタル」という言葉は小野コーチのもと、チームとして大事にしてきたキーワード。都予選決勝ではこの言葉を体現し、逆転勝ちに繋がった。すると3分、4分とフィクソの出川がタイミングの良い飛び出しでゴールを決めて逆転する。その後、同点とされたが、渡邊がキックインから右足を振り抜いて再び勝ち越し。しかし、終盤に2失点を喫し敗れた。

自分たちにとって初の全国は16強に終わったが、それでも「家族とか先輩・後輩が見に来てくれたり、ベンチに入れなかった人たちも応援してくれて、すごく白熱したバーモントカップだった」(澤邊)「初めはドキドキしたんですけど、いざやってみると、楽しむ感じで試合ができた。初めての全国はベスト16で終わってしまったけど、これから生かせるかなと思います」(出川)と試合を終えた選手からは前向きな言葉が聞かれた。

内野監督も「自分たちがやってきたことを生かした部分がすごく大きくて、そこは自信を持って選手たちもやってくれたかなと。東京の代表としてしっかりプレーしてくれたと思います」とし、「これを経験すると、しないとでは全然違う。こういう大会を経験できたことはすごく財産になる。ここはまだ通過点なので、ここからこういう経験を生かして次に繋げて欲しいと思います」と今後の成長の糧としてくれることを期待した。



日本サッカー協会 『サッカーファミリー丸となって、 SDGsの取り組みをサステナブルに』



持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。2030年までに目指す17のゴール・169のターゲットから構成されている。日本サッカー協会では2020年6月に「JFA SDGs推進チーム」が組成されて、このSDGsに関する取り組みを推進している。この活動への想い、これまでの活動、サッカーファミリーに伝えたい想いなどについて、日本サッカー協会の早崎 誠人さん、高倉 裕紀さんに話を聞いた。

—まずJFA内でSDGs推進チームが組成されることになった背景について教えてください

早崎：JFAは、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。」という理念を掲げています。こうした理念のもと、JFAでは、「する・みる・支える」の観点から、サッカー、スポーツに関わる機会を提供することだけでなく、「JFAこころのプロジェクト」のような教育的な要素を有する事業の実施など、様々な側面からSDGsに資する取り組みを行っています。他方、近年、世界的にもSDGsの達成に向けたアクションが求められ、企業経営においても重要なテーマとされている中、「サッカー・スポーツを通じて社会に貢献している」という発信だけでは十分ではなく、また、我々の事業そのものについても、より社会課題を意識したものへと変容させていかなければならないという課題認識がありました。

今回、こうした発信力強化や事業変容に対するアクションを推進する役割として組成されたのが「JFA SDGs推進チーム（現在はアスパス!チーム）」です。発足当初のメンバーはJFAの各部署から有志の職員が参画するほか、JFAアスリート委員会委員の播戸竜二さんにも加わっていただきました。各人の持つ強みと所属する各部の機能をかけあわせながら様々な取り組みを展開しています。この活動を推進していくにあたっては、トップの田嶋会長もSDGsに対する強い意志を様々な場面で発信し、JFAの中期計画においてもSDGsへのコミットを明記するなど、組織が一丸となって取り組んでいるところです。

—これまでの具体的な活動はどのようなものになるのでしょうか

早崎：SDGs推進チームでは、プロジェクト発足以降、日本代表戦や天皇杯決勝などのスタジアムで、ブースを設置し、情報発信やペットボトルの分別回収を行うほか、JFA競技運営部や外部団体との連携を通じて、聴覚や視覚など感覚過敏の症状がある方やその家族が安心して過ごすことができるセンサリールームの展開、経済的な課題を抱えるご家庭の方々や児童養護施設の子どものための観戦招待などを行っています。昨年は、LGBTQ+への啓発に向けた情報発信ブースの展開やウォーキングフットボールの体験会の実施などの新たな活動も実施しました。また、JFAハウスで使用する電気を再生可能エネルギーにより発電された電力に切り替えることや「女性リーダーシップ・プログラム」の展開など、JFAの各部署が

主体的に取り組んでいることも多くあります。2022年度にはこうした活動をさらに推進するべく、JFAとして重点的に取り組む5つの重要課題（環境、人権、教育、健康、地域）を設定した上で、活動の総称として「アスパス!」の名称とロゴを決定し、現在は「アスパス!」の名のもとに各種活動を展開するようになりました。

今ではJFAだけでなく都道府県のサッカー協会においても「アスパス!」の取り組みが行われるようになりました。例えば、イベント会場で使わなくなったボールなどを回収して必要な方に安価でお譲りし、その収益をユニセフに寄付するリユースマーケット（鳥取県サッカー協会）や、賞味期限がまだ残っている食品を回収



大分県サッカー協会が実施したフードドライブ

し、地元の社会福祉団体に寄付する「フードドライブ」（大分県サッカー協会）が展開されるなどのほか、都内で開催された競技会の会場では東京都サッカー協会の皆さまにウォーキングフットボールイベントの協力をいただくなど、地域の皆さまによる活動が増えてきており大変心強く感じています。

—事業的な部分での変化も出てきているのでしょうか

高倉：私が所属するマーケティング部では日本代表スポンサーや放送局、ライセンス企業など多くの企業との接点がありますが、取引関係にある企業側の環境が変化する中で、我々が提供する商品やサービスも時代に合わせて変化させていくべきではないかと検討をしておりました。

時を同じくしてJFA内でSDGs推進チームが発足し、全職員向けの研修を通じて、担当する仕事を通じて新たな提供価値と社会的責任を両立する取組が出来ないかと試行錯誤し、新しい動きが出てきています。我々の日本代表グッズを例にあげますと、従来マーケティング部では日本代表応援グッズの商品開発を行っています。局内の障がいを持つ職員との会話を重ねる中で、我々は無意識のうちに健常者を前提にした商品開発をしていたこと気付かされました。しかし我々JFAが大切にしたい人はサッカーを愛する全ての人であり、これまでのアプローチで取り残されていた人がいるのではないかと気付かされるようになりました。JFAの職員にも

視覚障がい、聴覚障がいを持った職員もいますので、彼らも商品開発に携わってもらい、当事者として必要なグッズは何かという開発会議を行いながら、そのコンセプトに賛同いただけるライセンスさんとやりとりを重ねることで、JFAからも誰もが使いやすい応援グッズの開発事例がいくつか出始めています。

また私自身は日本代表スポンサーシップを担当する部門に所属し、日々スポンサー企業のご担当者さんとやりとりを重ねる中で、企業側がスポーツコンテンツに求めるニーズが多様化・複雑化してきたことを実感しています。今までは試合を中心に企業・商品ブランドを露出することが重視され、認知を獲得するために試合看板を設置したり、選手が着用するウェアにロゴを付与したりといったニーズが一般的でしたが、近年はそれ以上に活動をともにすることで社会に様々なメッセージや働きかけを行っていく活動が求められるようになってきています。例えば、adidasさまは以前から海洋資源保護を目的に、RUN FOR THE OCEANS という走った分だけ海を綺麗にするというキャンペーンをサッカー以外のカテゴリで行っていましたが、JFAと協業することで、サッカー日本代表の試合で代表選手が走行した距離もこの



RUN FOR THE OCEANSでの砂浜ゴミ拾い

キャンペーンに含むというコラボレーションを実現し、キャンペーンの認知獲得だけでなく、サッカーファンもともにこの取組に参加して社会課題と一緒に解決していこうという新たなお付き合いの形が2021年より始まっています。

さらに、KIRINさまとの協業では、年齢や性別、サッカー経験の有無にかかわらず、家族や身近な仲間と楽しめるウォーキングフットボールイベント「JFA×KIRIN キリンファミリーチャレンジカップ2022」を昨年12月に開催し、誰もが参加できる体験を通じて、家族や身近な仲間とのつながり・絆を深めることができる場を提供しました。

また、毎年3月8日はInternational Women's Day（国際女性デー）として世界各国でジェンダー平等に向けた啓蒙・取組発信がなされていますが、我々JFAは3月8日を「JFA女子サッカーデー」と制定し、女子サッカーに関するグラスルーツの取組やインタビュー等を集中的に情報発信することを始めた結果、協賛企業各社もタイミングを合わせて各社が推進する女性活躍推進への取組を発信したり、JFAが共催してイベントを企画したりと、従来の試合を起点としたお付き合い以外での社会的なテーマを起点としたコラボレーションも生まれるようになってきました。



サポーターと共同開発して作成したポリ袋でワールドカップの試合を応援

—また昨年末のカタールワールドカップでも様々な試みを行ったそうですね

高倉: サッカーファミリーを巻き込みながら「アスパス」の思想を表現する試みを行いました。一つはファンからのメッセージを集めて選手たちへ送る「折り紙プロジェクト」です。日本代表の試合会場などで発生する紙ゴミを再利用して、再生紙でメッセージカードとなる折り紙を作成しました。そのメッセージを繋ぎ合わせて、ワールドカップ直前のカナダ戦で選手に届けたのですが、これはメッセージを届けるそのプロセス自体をサステナブルにすることを目指して企画しました。そしてもう一つはポリ袋です。サッカー日本代表のサポーターはこれまでの大会でも自発的にクリーン活動をしてきていますが、今大会も試合後に清掃をするということで、その取組をサポートすべくJFAとしてはポリ袋をサポーターと一緒に共同開発をして、

現地での配布までを協力しました。袋にはありがとうという言葉が日本語と英語、アラビア語で入って、日本人サポーターだけではなく日本代表を応援する外国人の方にもお渡しして一緒にスタジアムを青く染めて頂き、試合後にはゴミ袋として活用して頂きました。この活動はFIFAが選出するベストFIFAサポーターズアワードにノミネートされました。

—今後の活動のビジョンとしてはどのようなことを考えているのでしょうか

早崎: JFAとしてどんどん活動を行っていくことは当然必要ですが、同時に我々の取り組みが社会に対してどのような影響を与えているのかを把握し、事業を改善していくこと、外部にしっかりと伝えていくことも重要です。そのため、直近のアクションとしてJFAの活動における社会的インパクトを可視化することにチャレンジしていきます。そして、こうした取り組みを通じて、アスパスの活動に協力いただける仲間を拡大し、事業の質と量、実施範囲を充実させていければと思います。

組織の視点では、これまで推進チームが中心となって行ってきた各種のSDGs関連の取り組みを、今後は各部署が主体的に計画、実行する体制としていくことで、各活動が持続可能なものとなることを目指します。また、財政という観点では、新たな収益の柱を作っていく上でSDGsが重要な鍵になると考えていますので、アスパスの活動をさらに充実・拡大させ、経営にもより大きなインパクトを与えるものへと昇華させることが大きなテーマだと考えています。

SDGsは世界的な潮流で、今取り組まなければ社会から取り残されてしまうという危機感もあり、JFAとしてもしっかりとコミットすることが重要だと感じています。一方で、それ自体はあくまで手段であり、我々が本当に成し遂げたいこと、達成したいことは、その先にある理念やビジョンの実現であることを忘れずに今後も様々な取り組みを実行していきます。

—最後にサッカーファミリーの皆さんにメッセージをお願いします

高倉: これまでもサッカー日本代表をはじめ競技会の開催や指導者・審判育成の事業とともに展開してきましたが、これからはそれらに加えて社会的な課題に対しても全国で一緒に活動したいと願っています。JFAでそのような取組を始める中で、我々JFAだから出来ることがあるという気づきと同時に、我々では取り組めないこともあると感じています。特に地域の課題に関しては、その地域の方々の協力がないと実効的な取組ができなと感じています。これらの活動は、いかに皆さんと知恵を出し合って、手を携えてやっていけるかが大事だと考えています。もちろんJFAとして先行事例やメッセージを出していくことは変わらずに取り組んでまいります。それと同時に全国の各々の地域の人と共に、それぞれの課題に向けてタッグを組んでいければと思っています。

早崎: SDGsの活動は、JFAだけでなく東京都サッカー協会さまをはじめとする都道府県サッカー協会、さらには、我々を支えてくださっているステークホルダーの方々、サッカーファミリーの皆さんが一丸となって活動を推進していくことが重要です。さきほど紹介した鳥取県サッカー協会のリユースマーケットや大分県サッカー協会のフードライブのように、各地域での活動も活発になってきており、皆さんと連携しながら活動が広がっています。サッカー界に携わる一人ひとりが自分たちでできることを積み重ねていくことで、次の世代を生きるすべての人々が、安心してサッカーを楽しむことができるサステナブルな環境が実現する。そのような「誰ひとり取り残さないサッカー界」を皆さんとともににつくっていくことができればと思います。

JFAとサッカーファミリーの取り組み「アスパス」



アスパス!



https://www.jfa.jp/social_action_programme/about_ASU_Pass/

JFA Passport

サッカーがもっと楽しくなる
あなただけのパスポート

あなたに合った、ニュース、動画、お知らせ等を閲覧できる、
JFAが提供するサービスを総合的に利用できるアプリ！

いつでも、どこでもあなたの楽しみ方で
サッカーとつながろう！



アプリでしか 見られない動画や ニュースが満載！

JFA Passport限定のサッカー日本代表の動画のほか、保護者向け、指導者向けといったオリジナルの動画も配信！
YouTubeチャンネルの動画やJFA公式サイトのニュースもまとめてチェック可能！



あなたに 合ったイベントや プログラムに参加！

全国各地で開催されているさまざまなイベント・フェスティバルにアプリ内のフォームや会員証を使って、簡単に参加可能！
サッカーを始めたい小学生未満のお子さま向けには、課題をクリアするとスターターキットがゲットできるプログラムも開催中！



お得な クーポンや プレゼントをゲット！

サッカー活動に役立つ会員限定のお得なクーポンを入手できるほか、うれしいプレゼントがもらえるキャンペーンも順次開催！



※本紙に記載されている内容は予告なく変更になる場合があります。最新内容はWebサイトをご確認ください。

今後も様々なサービス・コンテンツが続々登場予定！

▼ダウンロードはこちらから



App Storeまたは
Google Playで検索

JFA Passport

検索

AppleおよびApp Storeロゴは米国および他の国々で登録された Apple Inc. の商標です。
Google Play および Google Play ロゴは、Google LLC の商標です。

※通信量などはお客様のご負担となります。
問い合わせ先：公益財団法人日本サッカー協会 050-2018-1990(代表)

技術委員会

ドイツ・スペインに勝利しグループリーグ1位通過してのラウンド16。クロアチアとのPK戦でまたしてもベスト8の壁に阻まれたワールドカップカタール大会。見えそうで見えず、でもうっすらと見えてきた新たな景色。

今大会で見えてきた景色は「個人をより強く！個人を磨く！」という未来像ではないでしょうか。

ワールドカップベスト4、ベスト8に進出する国の選手の多くはヨーロッパを中心にUEFAチャンピオンズリーグで日常を競い合っている選手の集合体です。SAMURAI BLUEもヨーロッパ海外組が中心となっていますが、UEFAチャンピオンズリーグ常連クラブでの活躍はまだ少数です。新たな景色、ベスト8の扉を開けるためにはより高いレベル/クラブで活躍している選手が必要である事は、多くのサッカーファミリーの共通認識であると思います。

「TOKYO発世界へ」

私たちの街、東京ゆかりの選手が次の、その次のワールドカップで活躍し新たな景色を見せてくれる。その為に技術委員会として取り組みを始めます。これまで行われている東京トレセン活動をより飛躍し、個の育成を高める仕組み作りに着手しました。2023年度中に東京で活動している都/地域トレセンコーチが可視化されたプレーモデルを共有します。

東京FA vision TOKYO発 世界へ - 個の育成 - として、

現在の活動分析から目標設定（世界で活躍する選手の礎となる選手を輩出する）



ベースとなるゲームモデルを作り上げ、そこから導き出されるプロファイルを策定



プロファイルは東京トレセン及び7つの地域トレセンスタッフで共有できる資料とし、具体的トレーニングを各コーチがトレセン活動実施



最後にモニタリング評価により再構築するサイクルを作り上げていく

これにより、TOKYO発 世界で活躍する選手を一人でも多く輩出し、ワールドカップで日本が新たな景色を見る事ができる一翼を担うことが出来ればと考えます。そして、東京におけるサッカー環境＝各種別連盟活動とトレセン活動の融合で飛躍していきたいと思っています。

技術委員長 中田 康人

審判委員会

審判委員会、と聞いて皆様のイメージはどのようなものでしょうか。審判員を資格認定して、指導して、協会主管試合へ審判員を割当派遣している、というようなところでしょうか。現代社会におけるスポーツやサッカー・フットサルの社会的意義や位置付けは時代と共に大きく変わってきている、と感じています。

その中での審判員の役割や考え方も変わりつつあると思っています。審判委員会も、審判員だけの事を考えているのではなく、時代の変化と共にサッカー界全体と一緒に進めていく事、共存共栄が求められていると認識しています。東京全体で見れば、協会派遣試合やその試合に関わる審判員は極少数であります。この部分を取り上げて審判委員会は活動しています、というのは公益財団法人東京都サッカー協会審判委員会としては東京全体への還元や貢献、使命役目を果たしていないと考えています。東京のサッカー・フットサルがグラスルーツやフェスティバルから都大会まで、キッズからシニアまで全ての試合やカテゴリーで、正しい競技規則による安全安心のサッカー・フットサルを提供することが、審判員には求められてい

ると感じています。全ての試合やカテゴリーを把握して審判員の普及育成指導を実現する、という事はとても大きな課題であると認識しています。

この課題に対して、審判指導者の充実が必要であると考えています。審判指導者の数と質を向上させて各種連盟、委員会、地区などに配置してコミュニケーションをとりながら柔軟に進めていきたい、と考えています。現状は審判指導者の指導育成強化の段階ですが、この指導者が活動するには現場のサッカー・フットサルと審判員が必要不可欠であり、結果的に東京全体のサッカー・フットサルの安全安心とスムーズな運営に繋がると確信しています。

この体制の全体コントロールを審判委員会が行い全体統括、情報集約分析、指導強化方針策定など対象となるサッカー・フットサルに的確にマッチさせていきたいと考えております。更にビーチサッカーも対象としていかなければいけない時代となってきています。審判員とはサッカー・フットサルには絶対必要な役割であり、常に全力で最大限の努力で取り組んでいます。是非サッカーファミリーとしてお互いにリスペクトして一緒に進んでいければ何よりの事であると思っています。引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

審判委員長 蒲澤 淳一



新型コロナウイルス感染症のため2020年度はご多分に漏れず連盟の活動は全て中止となった。自治体職員のチームで組織する連盟であることから当初は、市民の皆さまへ行動自粛等を求める中で競技会を実施していいのかとの葛藤があり、それは今も続いている。

一都七県持ち回りで開催する関東自治体職員サッカー選手権大会の第48回大会が2020年度は東京都が当番に当たっていた。関東連盟と協議し1年延期し八王子市を開催市として実施時期を当初の10月から2022年2月に延期するも新型コロナウイルスの猛威には勝てず、1月に「まん延防止等重点措置」が発令されたこともあり、苦渋の決断で大会中止を決定した。

2021年11月から行った東京都の予選では、1位練馬区役所、2位杉並区役所、3位東京消防庁、4位八王子市役所となり、東京都での開催であることから1位から3位と開催市枠で4位までのチームの出場はまぼろしとなった。

引き続きコロナ禍ではあるが2022年度の関東自治体職員サッカー選手権大会東京都予選は、9月3日から10月2日に行った。第49回大会は山梨県での開催予定で、東京都の出場枠2をかけた準決勝は、練馬区役所4-0八王子市役所、東京消防庁9-1青梅市役所となり練馬区役所と東京消防庁の両チームが出場権を得た。

ちなみに練馬区役所は、2013年度の第41回大会（開催市: 国分寺市）の東京都予選で優勝し出場を決めたが、本大会直前に台風が接近する予報のため大会が中止となった因縁を持ち、昨年度を含め関東大会開催・出場が三度目の正直となるかというところだ。

また、東京都自治体職員サッカー連盟主管のもう一つの主要大会が全国自治体職員サッカー選手権大会東京都予選で例年5月から6月に実施している。2020年度の全国大会は東京オリンピック・パラリンピックの開催を見越しスケジュールが組まれていなかったが、2021年度は7月に、2022年度は9月に指宿市での開催が組まれていたがいずれも新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。東京都予選について2021年度は組合せ抽選は行ったが大会は開けず、2022年度は5月14日から6月11日に行い、1位東京消防庁、2位杉並区役所、3位練馬区役所、4位八王子市役所となり、1位から3位までの全国大会出場が決まっていたがこれもまぼろしとなった。

一日も早い新型コロナウイルス感染症の終息を願うばかりである。

オフィシャルサイト <https://www.tokyofa.or.jp/category/league/jichitai.html>



東京都地区サッカー連盟は、各区・市・町サッカー連盟(協会)と東京都サッカー協会とを結ぶ唯一のパイプ役として、大会の主催・主管、情報交換などの連携を密にすると共に、将来の組織化を念頭に置きつつ、サッカーの普及に努力しています。2004年より東京都社会人チャンピオンシップ戦に区・市・町の代表チームの参加が認められ、大きな励みとなっております。

2022年度はコロナ禍において感染対策を万全に期し、第75回都民体育大会サッカー競技を5月1日～6月5日に駒沢第2球技場他にて東京都・東京都体育協会主催、東京都サッカー協会主管で31地区参加し実施しました。優勝: 千代田区、準優勝: 調布市、3位: 板橋区、4位: 八王子市、フェアプレー賞: 千代田区

また、第16回区市町サッカー選手権大会を6月26日～7月31日に府中市朝日フットボールパーク他にて東京都サッカー協会主催、東京都地区サッカー連盟主管で24チーム参加で行いました。優勝: 四谷FFC (府中市)、準優勝: FC OHANA (江東区)、3位: CHOFU LAGEMIA FC (調布市)、4位: GROOVY (三鷹市)、フェアプレー賞: CHOFU LAGEMIA FC (調布市)

今後も東京都サッカー協会と各地域の情報交換と相互理解の促進に努めていきます。

オフィシャルサイト <https://www.tokyofa.or.jp/category/league/chiku.html>



東京都自治体職員 サッカー連盟

会長
齊藤 功



2022年10月1日(準決勝) 練馬区役所(緑) V S 八王子市役所(赤)



2022年10月1日(準決勝) 東京消防庁(白) V S 青梅市役所(オレンジ)

東京都地区 サッカー連盟

委員長
児玉 健生



第75回都民体育大会サッカー競技で優勝した千代田区



第16回区市町サッカー選手権大会で優勝した四谷FFC

「連盟ニュース」では各連盟の大会結果・取り組みなどを4連盟ずつ紹介します。次号では、中体連、フットサル連盟、女子連盟、少年連盟を掲載予定です。

東京都高体連サッカー専門部は加盟校数320校、選手登録者数15719人（9月末現在）からなり、運営を支える役員数は280人にも上ります。高校サッカーを経験した多くの選手が、指導者、チーム関係者、役員、保護者として高校サッカーに戻ってくる環境により、発展を遂げてきました。これから多くの選手たちが夢をもてる環境を整備し、未来につなげていくことが我々の使命です。

東京高体連のチームからプレミアリーグ所属チームの出現、関東プリンスリーグで戦うチームの増加によって東京高体連チームの強化につながることを念頭に、連盟大会の整備だけでなく、2種全体の課題として多くの高体連のチームが所属する地区リーグの整備が急務となっています。加盟校数は横ばいですが、少子化の影響を受け、チームの人数が足りず試合に参加できないケースが散見され、高体連では合同チームを広く認めていく方向で動いています。人工芝のグラウンドをもつ施設や学校も増えてきましたが、ピッチ環境は他県に比べ弱点ともいえます。全国大会では、天然芝の会場が多く、東京都予選でも全国大会を見据えたピッチ利用を増やそうと、インターハイ都予選準決勝（代表決定戦）で今年度初めてAGFフィールドを利用しました。

徳島県で行われた2022年度のインターハイでは、帝京高校と関東第一高校が東京代表として戦い、帝京高校は見事準優勝を果たしました。全国高校サッカー選手権大会が毎年、関東1都3県で開催され、国立競技場で東京のチームがオープニングゲームをできることや、全国大会を毎年身近に見られるのも東京の強みです。

2023年5月27日～29日には関東高校サッカー大会が東京で開催されます。多くの方々に高校サッカーを楽しんでいただながら、選手にとって充実した環境を整えられるよう、これからも発展に寄与していきたいと思ひます。

東京都高体連 サッカー専門部

委員長
川人 健太郎



2022年度インターハイで準優勝した帝京高校



2022年度インターハイに出場した関東第一高校



オフィシャルサイト <http://tokyosoccer-u18.com/>



東京都クラブユースサッカー連盟では3月より第37回日本クラブユースサッカー選手権（U-15）大会東京都予選を開催しました。各チームが熱戦を繰り広げる中、関東大会を経て東京都の代表として東京ヴェルディ、FC東京深川、FC東京むさしの3チームが出場しました。

ただいま、第30回東京都クラブユースサッカーU-14選手権大会を開催しております。2次リーグも終盤に差し掛かり3次リーグ進出に向け各チームがしのぎを削っています。2月11日の味の素フィールド西が丘サッカー場での決勝戦にどのチームが勝ち上がって来るのか楽しみな所です。

そんな中、当連盟では早期に敗退したチームや出場機会の少ない選手たちに、少しでも多く公式戦を経験する場として、2008年度より東京フレッシュカップを開催しております。昨年の大会はコロナ禍の影響で大会途中で中断となりましたが、今年度はフレッシュカップの決勝の舞台も2月5日の味の素フィールド西が丘サッカー場と最高の舞台を用意しております。

また、選手、スタッフ、保護者、審判等様々な関係者からなるサッカー仲間へのリスペクトを改めて再確認するために、10月17日に全加盟クラブに向けウェルフェアオフィサー講習会を開催しました。東京都クラブユースサッカー連盟では今後も育成年代の心身共に健全な成長環境の提供や発展に尽力して参ります。

東京都クラブユース サッカー連盟

理事長
池内 成明



第37回日本クラブユースサッカー選手権（U-15）大会に出場した東京ヴェルディ



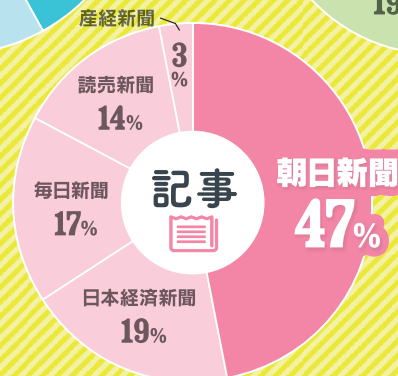
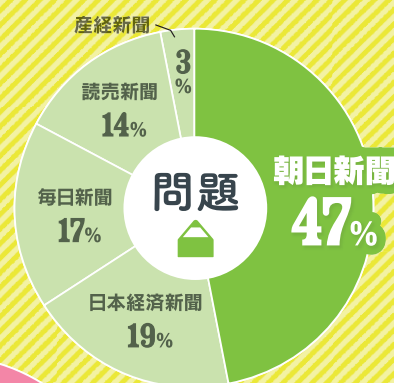
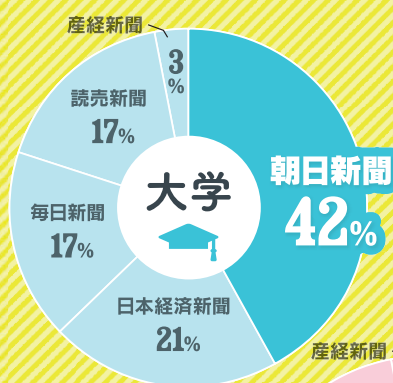
第37回日本クラブユースサッカー選手権（U-15）大会に出場したFC東京深川

オフィシャルサイト <https://tokyo-cy.jp/>



朝日新聞は 2022年度も 大学入試 出題数 NO.1

全国紙の2022年度大学入試出題実績



※大学通信調べ(2022年6月13日現在)。全国の大学にアンケート調査。対象は読売新聞(読売新聞オンライン)、朝日新聞(朝日新聞デジタル)、毎日新聞(毎日新聞デジタル)、日本経済新聞(日経電子版)、産経新聞(産経ニュース)、回答数792。

